関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

[翻訳] イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』（1554年）(3)

著者	工藤 康弘, 田島 篤史
雑誌名	独逸文学
巻	60
ページ	101-114
発行年	2016-03-20
その他のタイトル	[Ubersetzung] Jorg Wickram, Der jungen Knaben Spiegel (1554) Nr.3
URL	http://hdl.handle.net/10112/9987

関西大学『独逸文学』第60号 2016年3月

翻訳

イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(3)

工藤 康弘・田島 篤史訳

はじめに

本稿はイェルク・ヴィクラム（Jörg Wickram）の『少年の鑑』（*Der jungen Knaben Spiegel*, 1554）本文第五章、第六章および第七章の翻訳である[1]。本稿の二人の共訳者は「大阪初期新高ドイツ語研究会」を発足させ、2014年3月より活動を始めている。本稿はその成果の一部であり、すでに本作『少年の鑑』のタイトルページ、献辞、本文第一章から第四章と作品・作者の解説は発表しているため、関心を持たれた読者諸賢はそちらを参照していただければ幸いである[2]。

翻訳にあたり底本としてハンス＝ゲルト・ロロフ（Hans-Gert Roloff）の編纂によるヴィクラム全集を用いた[3]。またゲルトルート・ファウト（Gertrud Fauth）およびミヒャエル・ホルツィンガー（Michael Holzinger）による二冊の校訂版も参照した[4]。前者はヴィクラム研究の

1 Wickram, Jörg: *Der jungen Knaben Spiegel*, Straßburg: Frölich, 1554.

2 工藤康弘・田島篤史訳「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)」、『関西大学西洋史論叢』第17号、関西大学大学院文学研究科史学専攻西洋史専修、2014年、20-32ページ。同「イェルク・ヴィクラム『少年の鑑』(1554年)(2)」、『独逸文学』第59号、関西大学独逸文学会、2015年、231-241ページ。

3 Wickram, Georg: *Sämtliche Werke, Bd. 3 : Knaben Spiegel; Dialog vom ungeratnen Sohn*. In: Roloff, Hans-Gert (Hrsg.), Berlin: W. de Gruyter, 1968, S. 1-121.

4 Wickram, Jörg (Verfasser), Gertrud Fauth (Hrsg.): *Der Jungen Knaben Spiegel; Mit dem Dialog: Eine Warhafftige History von einem ungerahtnen Son.*, Straßburg: Karl J. Trübner, 1917; Wickram, Georg (Verfasser), Michael Holzinger (Hrsg.): *Der jungen Knaben Spiegel*, Berlin: CreateSpace Independent Publishing Platform, 2013.

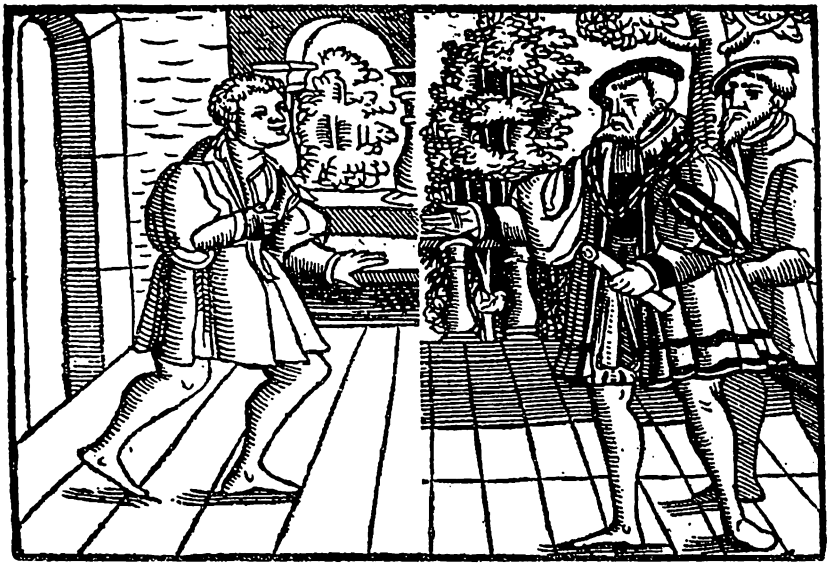
第一人者による校訂版であり、前書きと後書きにヴィクラムおよびその作品の詳細な解説が付されている。後者は1903年のヨハンネス・ボルテ（Johannes Bolte）による一連のヴィクラム作品の校訂版を、ホルツィンガーが作品ごとに廉価なペーパーバック版で復刻したものである。このホルツィンガー版はコンパクトで参照しやすい反面、原典に収められている木版挿絵の一切が省かれているため、作品の臨場感といった点ではやや物足りなさを感じる。以上に加えてバイエルン国立図書館所蔵の初版テクストがオンライン公開されているため、そちらも適宜参照した[5]。

なお原典には章番号もコンマやピリオドや段落の切れ目もない。ファウト版およびホルツィンガー版は独自に章番号を付し、文章を区切り段落分けをしている。本稿ではこれら二版の章番号に従いつつも、文章の区切りと改行は独自に行った。また本稿中に挿入している挿絵はファウト版の該当箇所をそれぞれの典拠としている。

5　http://daten.digitale-sammlungen.de/~db/bsb00008420/images/（2016年1月6日アクセス）。

第五章

ゴットリープがフリートベルトに息子のことを真剣に尋ね、改めて傅役に息子を委ねたこと。



騎士ゴットリープは息子が他の仲間と関わっていることを聞くと、心から心配し、さらに尋ねて言いました。「愛する息子フリートベルトよ、わが息子ヴィルバルトがお前のもとを去って他の仲間に与した由、容易ならざる事態に違いない。お前たちは互いにけんかでもしたのか、言ってくれ。」フリートベルトは言いました。「いいえ父上、ただヴィルバルトがある悪い若者の仲間になっただけで、その若者がまじめな少年にはふさわしからぬまったく不埒なことをやっているのです。」「その男は誰なんだ」と騎士が言うと、フリートベルトが答えて言いました。「ある肉屋の息子で、名をロタールと言います。彼の最大の徳ときたら、嘘をつき、つまみ食いをし、盗みを働き、少年を徳から悪徳へ導く以外の何物でもありません。私は今日彼に、愛する弟を誘惑しないでくれ、悪い

ことをするなら弟抜きでやってくれと言葉で注意しました。これに対してロタールは私を乱暴にののしり、父と母の貧しさをあげつらい、脅し文句で突っかかってきたので、力では一番の彼に譲らねばなりませんでした。」騎士は言います。「わが息子ヴィルバルトはそれに対して何と言っているのだ。」フリートベルトは言います。「何も。ただ笑って顔をそむけただけです。右手に長い枝を持って、それでもって彼らは今丸みを帯びた十字架や輪からヘラー銅貨やペニヒ硬貨を撃ち落としています。あの連中はときどきサイコロやカードも使って遊びます。そういうときはロタールの姿を通りで見かけなくなります。少なくとも彼はカードかサイコロをふところに忍ばせています。」

こうした言葉を聞いてゴットリープは大いに心を痛め、怒った声でフェーリクス（二人の若者の傅役）に言い始めました。「フェーリクスよ、私はお前を心から信頼してきたのだ。息子がそのような悪い若者と知り合わないように、お前が細心の注意を払ってきたと思っていた。教育係にふさわしいのは、自分の生徒を熱心に見守ることだ。何はともあれお前に対する私の親しさはともかく、お前に命ずる。全力をあげて真剣に見守り、息子を再び神を畏れる心へ導いてくれ。息子がそのような思い上がった悪い仲間から距離を置き、もとのたしなみや恥を知る心に戻るためには、鞭を使ってかまわない。というのも、もし息子が悪い根をはって成長したら、もうそこから抜け出せないのではないかと心配だからだ。そんなわけで信頼のおける傅役として教師として振る舞いなさい。鞭の手を緩めてはならん。必要に応じて使いなさい。」主人の怒った様子を見てフェーリクスは言いました。「お慕いし、信頼申し上げているご主人さま、当初からお見せしているように、私はいつもご子息に対して、自分の努力や苦労を惜しんだことはございません。ですからほかならぬ私を信じていただきとう存じます。」

こうして彼らが話し合っているあいだ、ヴィルバルトが息をはずませ、だらしない格好で手も洗わずに食卓へ急いでやってきました。まるで知性のない動物が食い物のところへやってきたかのように。善良なフェーリクスはこれをやんわりとたしなめましたが、ヴィルバルトは悪意のある目つきでフェーリクスをにらみつけました。息子のそのような態度を見た父親の心はひそかに涙で曇りました。彼は深いため息をついて空を

見上げ、心を痛めながら思いをめぐらしました。

「ああ天におわします私の父よ、あなたの贈り物はかくもすばらしく人間たちのもとへ配られています。というのも、この私の息子が本当の手本ですから。私は息子を技芸や徳のために教育を受けさせ、私の貴族の心を受け継がせようと、全力を傾けようとしました。ああ神さま、息子は私の意とは異なったことをしようとします。こうさせているのは彼のあつかましい悪い仲間で、彼をそのような悪行へ駆り立てるのです。これに対して小作農家から自分の子として預かったもう一人の息子は、貧しく粗野な人たちから生まれたにもかかわらず、違う心を持っています。彼はあらゆる技芸や徳にいそしみ、神を畏れ、誠実で物静かで、先生と傅役に対して従順です。息子にはしつけも罰も効果がないのを見ている以上、彼をどうすればいいのでしょう。」

ゴットリープがこうして長い時間黙って天を仰ぎながらすわり、目にうっすら涙を浮かべていると、食卓で誰よりも早くこのことに気づいた妻が彼にやさしく語りかけました。「旦那さま、食事をとろうともせず、朗らかになろうともしないなんて、なぜ気がふさいでいるのですか。気になっていることを言ってくださいまし。私にできることなら、心から慰めてさしあげます。」深いため息をついたゴットリープは愛する妻を見て、手をたたき、悩む心の内を彼女に言います。「ああ、愛するコンコルディア、私をこんなに心配させている悩みは小さくない。私たちの息子にはあらゆる期待を寄せているのに、ヴィルバルトときたらこんなに身を持ち崩し、不埒な悪童たちと関わり合い、彼らからは何もいいものを見たり学んだりできない有様を見なければならないからだ。彼にはあらゆる無作法や気まぐれが根を下ろしており、決してそれをやめないのではないかと心配だ。私が大いに胸を痛めているのはこのことだ。へたをしたらこれがもとで私の墓場行きが早まるかもしれない。」

奥方のコンコルディアがやさしい言葉をかけました。「旦那さま、私たちの息子の愚行や幼稚な振る舞いをそんなに大げさに嘆かないでくださいまし。ご自分でもよくおっしゃっていたじゃありませんか、知性は早くは身に付かないと。もう少し彼の若さが暴れるままにまかせておいてはいかがですか。神さまが彼の命を長らえさせてくれたなら、私たち二人の跡を継いでくれるでしょう。若さは隠してはおけないものです。

袋の中に閉じ込めておくこともできません。ですから旦那さま、そのような心配は心の中から追い払ってくださいまし。」

ゴットリープが答えて言いました。「だがコンコルディア、ヴィルバルトが日増しに不作法で、神をも畏れぬようになっていくのをお前も見ているだろう。彼が更生するなどというのは誤った期待だ。というのも、最初彼が学校へ行っていたころは、その若さにふさわしくあらゆる徳を目指して頑張っていたが、やがて仲間のフリートベルトから離れ、他の悪い連中と付き合うようになってしまったからだ。翻ってフリートベルトはその行動で日々精進し、時が経つにつれ能力を伸ばしていった。思うに、私たちの息子もそのようにすべきだったのだ。」

父親と母親がこうして話し合っているとき、ヴィルバルトは立ってその言葉に耳を傾けていましたが、まるでガチョウに説教しているのと同じで、心の中では「食事が済んだらまたロタールのところへ行こう。あんたがたのたわごとを聞くより、あいつのところにいたほうがずっとおもしろいや」と考えていたのでした。

ゴットリープは息子のいる前で傅役のフェーリクスに命じました。引き続きしっかりと目を光らせていてくれ。鞭で息子を抑えて、あのような不埒な悪い仲間から引き離し、他のまじめな少年たちを選んでくれ。その少年たちを息子といっしょに家へ連れてきて、彼らといっしょに楽しく過ごし、庭や緑の草原や森に散策に行ってほしいと。それは実現しましたが、長くは続きませんでした。というのも以下にお話しするように、ヴィルバルトがまた昔の仲間を探しに出かけたからです。

第六章

ヴィルバルトが彼の傅役の罰に少しのあいだしか我慢できず、罰せられたとき、傅役の太ももをナイフで刺してしまったこと[6]。

ヴィルバルトが父親の言っていることを聞いていたとき、ほとんど怯えることもなく、こっそりと自分自身に話しかけていました。「ヴィル

6　表題の後半部分の内容は第七章のものである。

バルトよ、この食事はうまかったか？そのナッツは殻を割って、中身を食べなきゃいかんぜ。それから切なそうにか、それとも甘い感じで歌いなよ！はぁ、オレが気の合う仲間たちから完全に引き離されたら、あいつらなんて言うだろうか？そうだ、世話係に気づかれず、こっそりロタールのところへ行けるようになったらすぐに、あいつに相談しなきゃならんぞ！いつも見張られているからな。だけどまずは母上のところへこっそり行って、自分が脅されているこの窮状を涙で訴えよう。何とかしてこの苦境から逃れよう。きっと母上があの世話係のフェーリクスに頼んで、事態がうまくいくように、そしてオレがあいつらを裏切らずに済むようにやってくれるだろう。」

ヴィルバルトがそのようなことを自分自身に語りかけると、彼は母親のもとへ行き、彼女がたった一人で居間にすわっているのを見つけました。しかしヴィルバルトは母親には一言も話しかけず、そのかわりにまったくの嘘泣きを始めました。母親は息子からの訴えに少なからず不安になると、優しく穏やかな声で息子に話しかけました。「私のかわいい坊や、一体何があったの？あなたを困らせているのは何？病気なの、坊や？対処の仕方を見つけて、病気のあなたを助けるためにも、手遅れにならないうちに私に教えてちょうだい。」ヴィルバルトは「あぁ、母上」

と話し始めました。「僕は哀れな子です。高貴な騎士から生まれた僕が、悪い生徒に苦しめられ、押さえつけられるのですか？これがあまりにつらくて、僕の心が真っ二つに引き裂かれるのではないかと心配です。だからそうならないうちに、父上の寵愛と慈悲を失ってでも、いっそ遠くへ行って馬でも駆るか豚の番でもしたいんです。僕は博士や聖職者になるつもりもないのに、父上は無理に学校へやるのですか？父上が僕を騎士にするおつもりなら、騎士のあり方を学ぶのに生徒である必要はありません。学校にいるよりも、僕は自分と同じく物怖じしない少年たちと一緒にいた方が男らしくなれます。またその少年たちは何にも恥じ入ることがなく、誰の前でも臆することがありません。そしてフリートベルトはみんなより年上だけど、あいつが僕たちのやることなすことになんだかんだとけちをつけているのをみんな知ってるんです。だけど僕の仲間のフリートベルトに何ができるって言うんですか。彼は叱られたり、望むことをすぐにやってもらえなかったりすると、『あぁ、神さまお願いします』とか言って、ときどき赤ん坊のように泣きじゃくっています。そんな彼から男らしさについて何を学べというのですか？だから愛する母上、お願いです、父上に言って、僕からそのような束縛を解いてもらうよう取り計らってください。そうでなければ、僕はここにとどまりたいとは思いませんし、またとどまることもできません。フリートベルトも説得には従うでしょう。」

母親は女の常として、きつく息子を叱りつけることはせず、穏やかな言葉で言いました。「私のかわいい坊や、あなたはそれでもお父さまに会って話さなければいけませんよ。あの人がどれだけあなたのことを愛しているか考えなさい。お父さまはどんなときでもあなたのことを思っています。二言目にはいつも、息子であるあなたについて言っています。あなたがお父さまに従わなければ、それについて神さまに申し開きすることは難しいに違いないわ。だからかわいい坊や、そんな悪いことは考えないでちょうだい。安心しなさい。あなたの傅役にそんなに厳しく当たらないように頼んでみます。彼があなたに優しく寛大に接してくれるよう、十分な贈り物を届けましょう。」

ヴィルバルトは母親の言葉のせいで、少なからず意固地になると、かつての性格が再び顔を出しはじめ、ロタールとつるむようになりました。

彼らは博打やつまみ食い、詐欺と、すべての悪さをして暇をつぶしました。さて傅役のフェーリクスが偶然彼らのもとに来たとき、生徒のヴィルバルトを叱りました。彼はすぐさま母親のもとへ走っていって、このことを訴えました。母親はすぐにフェーリクスのもとへ走っていき、愛する息子である彼の生徒に優しくしてあげなさい、知識はすぐには身につかないのだからと、ガミガミ怒鳴りつけました。フェーリクスがこれは主人の命令だと述べると、奥方は次のように言いました。「はぁ、私の主人である夫がすべてを知る必要はありません。フェーリクス、あなたはときおり片目をつぶらなければいけません。そして息子が仲間のもとで気晴らしするのを見かけたら、あなたはどこか別のところへお行きなさい。そしてまるでこのことについて何も知らないかのように振る舞いなさい。あなたがそうしてくれると、私はこの上もなく嬉しいわ。仮に主人がそのようなことを聞き知ったとしても、私はあなたのことを十分にかばうつもりです。ですからそのときは、あなたも私からの素敵な贈り物を待っていてちょうだい。」

この奥方の言葉がところどころ気に入らないフェーリクスでしたが、次のように考えました。「さあ、その息子はあなたの子ですよ。私にとって特に利益がなかろうと、ヴィルバルトは健全になります。はぁ、あなたがヴィルバルトを手元に置いて、恥ずべき振る舞いに目をつぶるというのなら、彼は役立たずのならず者になってしまうでしょう。」奥方がフェーリクスに与えると約束した贈り物も、彼をこのような気にさせたのでした。そしてヴィルバルトに対するあらゆる熱意が消え失せ、フェーリクスは熱意のすべてをフリートベルトに注ぎました。さて騎士はというと、自分の妻が、母親の常としていつも馬鹿になりうることをすでに知っていました。そういうわけで、親の息子たちがときおりどんな状態になるのか、つまり彼らが先生の罰やしつけを軽んじるので、しまいには学校の先生に加えて、刑吏を雇わなければならないというような光景を皆が目にするのです。このことはしばしば、彼らの両親にとって大きな災い、悲しみ、悔やみにまで育つのです。

そんな状態が続いていました。ヴィルバルトは傅役といて、母親が彼に話をしてくれたことをすぐさま理解すると、ようやく悪さ三昧できるようになり、自由になったと親友のロタールに報告しました。ロタール

はヴィルバルトとともにこれを大いに喜ぶと、次にヴィルバルトが母親と協力して何をすべきか、母親に逆らって何をすべきかについての新たな授業を行い、次のように言いました。「オレのヴィルバルトよ、お前さんは今、とても楽しい気分だろう。あの貧しい農夫の息子がお前さんに執着することを、母君はきっとこれ以上は許さんだろう。だがお前さんもまた、あの農夫の息子に対して真剣に怒らなきゃならんぜ。もしあいつがお前さんのことを叱ろうものなら、オレのことを一生忘れないほど、一度あいつの皮を本当に引き剥がしてやる。さらに、オレのヴィルバルトよ、お前さんは母君に金をせがまにゃならん。このことはオレも自分の親父にするつもりだ。これがうまくいかなかったら、オレにはもう一つの考えがある。気がついたんだが、親父が肉屋から帰るといつも、寝室にある戸棚の上の深皿に売り上げを入れて置いておくのさ。オレやお前さんや他の仲間たちが楽しくいられるように、オレはいつも自分の分をそこから持ち出せる。だからお前さんもそうしてくれ。わかってると思うが、オレたちともに大人になり始めている。もしワイン酒場やビアハウスにしょっちゅうオレたちが顔を出さなかったら、お前さん自身も見てきて知ってるように、他の同い年くらいのやつらになめられるに決まってる。そのうちオレたちゃじじいになって、ワインもビールも毎日飲む必要がなくなるぜ。グラスやビールを見た途端、頭の中で酔っ払っちまうよ。だから今を楽しむに限るし、そうすべきなんだ。」

ヴィルバルトはとても真剣に、彼にとって最後にとても役に立つ（と言っても逆の意味ですが、このことについて読者のみなさんはそのうち耳にするでしょう）このロタールの素晴らしくも誠実な教えに耳を傾けていました。さて件の少年たちは、嘘つき、詐欺、つまみ食いそして盗みの練習を始めました。またとても長いあいだ、他の同い年くらいの不良少年たちといっしょにそういったことをしました。彼らはサイコロやカードを使って、大いに騒いだりカードを交換したりすることを覚えたのです。手短に言えば、彼らが練習していたすべての「善き」行いは、皆を絞首台へと送るものだったのです。つまり、私たちの愛する息子が教師から罰せられることに我慢できないと、こういうことになるのです。

第七章

ヴィルバルトがある飲み屋にいるのを知った父親が下僕を差し向けたが、ヴィルバルトは言うことを聞かなかったこと。

読者のみなさんはあの恥ずべきロタールがいかに「善き」教えによって高貴な生まれの若者ヴィルバルトを幼いころから導いてきたか、そしてヴィルバルトがいかに熱心にロタールのあとをついてきたかを十分に理解されました。二人はそんな関係を続けてきましたが、とうとう老騎士ゴットリープがある日このことをかぎつけ、ある飲み屋で息子が「善き」仲間といっしょにいるのを見つけました。ゴットリープの親しい友がそこで二人を探っていたのでした。ゴットリープは心の底から悲しみましたが、悲しみを断ち切って馬丁を遣わし、息子に家へ帰るよう伝えさせました。ヴィルバルトは例によってすぐには従わず、好機が訪れるまでのらくら者たちのところにとどまりました。というのも、以前にもよくあったように、事に当たって母親が一番いいアイデアを出してくれることを知っていたからです。

さて善良な老騎士が家に帰ると、いらいらしながら息子の帰りを今か今かと待っていました。しかしヴィルバルトが帰ってきそうもないので、

傅役のフェーリクスに使いを出しました。というのも、息子がまたもやあのような連中といっしょなのではないか、そしてそれをフェーリクスが見逃しているのではないかと疑ったからでした。さてフェーリクスともう一人の若者フリートベルトが騎士の前にやってくると、老騎士ゴットリープは非常に怒って話し始めました。「フェーリクス、息子に対するお前の怠慢さは何度も言ってきた。それがどれほど効き目があったかは、残念ながら私の親しい友人たちから報告を受けなければならない。彼らは実際お前よりも多く、息子に注意を払ってくれている。息子を見つけるために、彼らは私を大衆酒場へ連れていった。そこで見た息子は他の悪童どもといっしょにありとあらゆる恥知らずな悪行で青春を食いつぶしていた。これはひとえに息子を託されたお前の責任だ。このようなことになろうとは夢にも思わず、お前が息子をあらゆる悪行から抜け出させ、徳ある行動へと導いてくれたものと思っていた。しかしすべては期待外れになってしまった。このことを神さまに訴えねばならない。お前はその怠慢ゆえ、私から不誠実な僕として罰せられて当然だ。」

騎士の言葉にフェーリクスは少なからず驚きました。奥方も居合わせて取り成してくれたのですが、騎士の怒りを鎮めることができず、善良なフェーリクスと騎士の仲を取り持つこともできませんでした。それほどまでに騎士は心の中で怒っていたのでした。一部は自分の妻に責任があると言い、息子のことで彼女をもひどくとがめ始めました。かわいい息子のことを悪しざまに言われた母親たちの心が皆そうであるように、奥方は聞いていられませんでした。そこで彼女は深いため息をつき、心で涙しながら立ち去りました。これ以上嫌なことを聞きたくなかったのです。これでフェーリクスは少なからず安心しました。というのも、母親がいないほうが弁明しやすかったからです。彼は主人に対し、次のような意見を述べました。

「ああ、厳格な騎士さま、お願いですからあなたの哀れな僕である私に、そのようなひどい疑いをかけないでください。と言いますのも、忠実で神を畏れる私の心はあなたから決して離れはしませんでしたし、またいつもあなたのご子息の安寧のために心を砕き、ここにいる（あなたのお慈悲によって受け入れられた息子の）フリートベルトと同じくらいの徳と教養を得させるために教育することができました。しかしすべては無

駄でした。ヴィルバルトは初めはとても熱心に励んだので、その繊細な若さにあまりにも多くを詰め込むのではないかと心配したほどでした。それで私はヴィルバルトに数多く気晴らしをさせました。たとえば何度か私たちは野に出て花を眺め、鳥のかわいらしい歌、さらさらと流れる小川、冷たい湧き水に興じました。そして家に帰ってはまた勉強をしたのです。ヴィルバルトはしばらくはこうしていましたが、フリートベルトのようには続きませんでした。このことで私は少なからず苦しみました。どんな悪霊が彼を肉屋の息子、軽薄なロタールのもとへ連れていったのかわかりません。ヴィルバルトはロタールからいいことは何も学ばず、あらゆる悪徳を見て学びました。ロタールがヴィルバルトをあらゆる善い行いから遠ざけたからです。しかしフリートベルトのほうはロタールのような人となりを嫌っていたということもありますが、彼は私がロタールの手から引き離しました。ですから厳格な騎士さま、まるでこのごたごたの責任が私にあるかのように、私を責めないようお願いいたします。」

誠実な老騎士ゴットリープは心を痛めて言いました。「フェーリクス、お前に責任があるとすれば、ひとえに本気で息子を鞭と恐怖でしつけず、あのような悪童やだらしない連中から引き離さなかったことにある。だから私はお前を訴えて当然だ。お前とは息子のことで何度も話し合い、彼を甘やかさないでほしいと言った。だからお前が悪いとしか思えないのだ。」

フェーリクスは母親の並々ならぬ思いやりを持ち出してさらに主人に許しを乞いました。ゴットリープがフェーリクスに息子を厳しくしつけるよう命じても、母親が切々と懇願して、自分の息子にきつく当たらないでほしいと頼んできた。それで自分は、奥方の怒りを恐れたということもあるが、ときおり何もしないでいたのだと。

騎士はこれを聞くや、フェーリクスに対して少し態度を和らげながらも、次のように命じました。飲み屋へ行き、大勢の人たちの前で丈夫な鞭で息子を打て、そうすれば息子はそれだけ多くの面前で恥をかくだろうからと。フェーリクスはこれに納得し、丈夫な鞭を作り、飲み屋へ行くと、生徒のヴィルバルトが酔っ払って仲間たちのところにすわっているのを見つけました。ヴィルバルトは自分の先生や傅役など眼中になく、

ロタールと贅沢三昧をしていました。フェーリクスはヴィルバルトにテーブルから離れろと要求しました。しかしヴィルバルトが反抗的で馬鹿にした態度をとったので、フェーリクスは彼の髪の毛を引っ張ろうとしました。彼の仲間たちも力ずくで抵抗しました。主人に怒られたことが頭にあったフェーリクスはますます激怒し、詰め寄ってヴィルバルトをつかみ、長椅子に押さえつけ、彼のズボンを引き裂きました。しかしフェーリクスはすぐに鞭を用意することができませんでした。ヴィルバルトはひそかにナイフを鞘から抜いて、フェーリクスの太ももを刺しました。フェーリクスはこれに気づくやいなや、その堕落した若者を取り逃がし、痛みを覚え、傷口を縫ってもらうために医者へ急ぎました。

そこに居合わせたフリートベルトは大急ぎで家に走り、主人に事の次第をすべて話しました。それでゴットリープは息子とその仲間たちに新たな怒りを覚え、激怒して息子のいる飲み屋へ走っていき、彼を自ら罰しようとしました。しかし用心していたヴィルバルトは仲間とともに店の裏から人気のない路地へ逃げました。のちにお話ししますが、この日からゴットリープが彼の馬鹿息子を見ることは二度とありませんでした。